

運動不足だと自覚したのは、駅の階段を上っただけで息が切れた朝だった。

（このままじゃ、まずいかも）

社会人になって半年。研修が終わってデスクワークが本格的に始まってから、腰の痛みがずっと引かない。体重計の数字は、もうずっと見ないふりを続けてきた。けれど鏡に映る自分の姿は、そろそろ言い訳がきかなくなっている。

何か始めなきゃと思っても、激しい運動は続かない。そんな俺の目に留まったのが、『初回限定・マンツーマンパーソナルストレッチ』というスタジオの広告だった。

（ストレッチ……！）

ストレッチなら、自分で動くというより、トレーナーに体を預けるだけでいい。運動音痴で人見知りの俺でも、これなら続けられるかもしれない。そう

思って、ネットの予約フォームをおそるおそる開いた。

氏名、電話番号、メールアドレス。そのあたりは、なんとか埋められた。次に「ご希望のコース」という欄があって、『初回体験・マンツーマン（60分）』にチェックを入れる。『ご希望の日時』は、仕事が休みの土曜日の午前中を選んだ。

「それから、女性のトレーナーを希望します、と…
…」

インストラクターの希望性別のところで、『女性希望』を押して送信ボタンを押した。

——俺には、どうしても男には見せられない体の秘密があった。

男の体なのに、下半身に女の器官がある。カントボーイ、なんて言葉があるのは後から知った。物心ついた頃からずっと隠してきた。健康診断も着替えも苦手で、男に下半身を見られたら、絶対に変だと思われる。だから、施術で体を触られるなら、相手

は女性がいい。

予約確認のメールで『ご希望承りました』と返ってきて、俺はすでに大きなことをやり遂げたような気分だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

予約の当日。俺はそのスタジオの扉を押した。

木目の床に、ほんのり温かい照明。ふわりと漂うアロマの匂いが鼻をくすぐり、それだけでこわばっていた気持ちが少しほどける。

受付を済ませ、更衣室でレンタルのトレーニングウェアに着替える。それから受付の女性のにこやかに案内され、一番奥の個室へ通された。

窓がなく、防音もしっかりした静かな部屋だった。外の音は何も聞こえない。まるで世界から切り離された小さな箱みたいだった。

（ここで施術するんだ……）

施術用のベッドの端に腰かけて待つ。心臓がとくとくと控えめに鳴っている。

やがて、カチャリと音がして、扉が開いた。

「お待たせしました。本日担当させていただきます、谷川成充（なりまさ）と申します」

低くて穏やかで、やけにゆっくりした声だった。顔を上げた俺は、そのまま固まってしまった。

そこに立っていたのは、背の高い男の人だった。

俺より頭ひとつ、いや、それ以上に大きい。百八十七センチくらいありそうな長身だった。二十七、八歳くらいだろうか。整った顔立ちに、すらりと手足が長く、無駄な力の抜けた立ち姿がきれいで、黒いウェア越しにも引き締まった体のかたちがわかる。大人の色気のある切れ長の目が、静かにこちらを見下ろしている。

（え……男の人……？）

「あの……っ」

声が裏返った。俺はうろたえて、タオルをぎゅっと握りしめる。希望欄に確かに女性って書いたのに。混乱して口をぱくぱくさせている俺を見て、成充さんはずっと表情を曇らせた。

「女性のトレーナーでは……？」

「……失礼しました。女性の担当をご希望でしたか」

こくこくと頷く。成充さんは手元のタブレットを確認してから、深く頭を下げた。

「申し訳ありません。こちらの手配ミスです。ご希望を担当に共有できていませんでした」

頭を下げたまま、成充さんはしばらく動かなかった。

「今日担当する予定だった女性トレーナーが、急遽対応できなくなりまして。その際の引き継ぎが不十分でした。お客様には何の落ち度もありません。完全にスタジオ側の問題です」

淡々としているのに、言葉のひとつひとつが丁寧だった。言い訳をしない。責任の所在をはっきり口にして、それからまた静かに頭を下げる。

「本当に申し訳ありませんでした」

「い、いえ、あの、そんな、頭を上げてください…
…」

こんなふうに謝られると、怒るどころかこちらが恐縮してしまう。俺は慌てて手を振った。成充さんはゆっくりと顔を上げると、困ったように少しだけ眉を下げた。

「今日はこのままお帰りいただいても構いません。
ただ——」